幻夢抄録―目覚め―８章

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻夢抄録―目覚め―８章

【Ｎコード】
Ｎ０８９３Ａ

【作者名】
維月十夜

【あらすじ】
母に会いに行くはずだった氷魚は、『母は、殺されて死んだ』という真実を知り、衝撃のあまり、倒れてしまう。

覚醒―邂逅―

「氷魚！？おいっ、しっかりしろ！氷魚っ」
何度も呼びかけるが、返事は、ない。
瞼は固く閉じられ、光のもとでも、彼女の頬は、青ざめて見えた。
瑪瑙は、氷魚を抱えて、必死に村へと戻った。

草原、だった。
氷魚は、一面の草海原に、佇んでいた。
「どこなの？ここ」
自分以外、誰の気配も感じない。
氷魚は、周囲の景色を見わたす。
きれいな、景色だった。
しかし、どこか寂しげで、何かが物足りないような感じがした。
「あたし、一人なんだ」
ぽつり、と呟くその声も、風がかき消していった。
風が渡り、草がなびいていく。
ふと、呼ばれたような気がして、氷魚は振りむいた。
「だれ？」
「氷魚、目覚めよ…」
よく通る、力強い、女の声だった。
「だれ？女の、ひと？」
そこに立っていたのは、赤い髪を、一つに結った女性だった。
「私は、お前の母だ」
「え？」
「時間がない、手短に話す。氷魚…お前はまだ、完全に目覚めていない。だから今…目覚めてもらう」
「覚醒（めざめ）！？あたし、もう目覚めたはずじゃ…」
「いや、剣士としての目覚めだ、お前は、限りなく私に近い、そう

いう血が流れている。お前なら、できるよ」
スゥ、と緑色の草海原が、薄れて消え、代わりにそこに現れたのは、硝子(ガラス)のように透き通る氷が広がる、氷原だった。
「なに、ここ…」
「あそこをごらん、お前の中に、流れるべきものだ」
氷魚の、母だと名乗る女性は、少し離れた場所の、氷を指さした。
「これって、あたし！？」
そこには、氷の中で横たわる、もう一人の自分がいた。
「凍ってる…死んでるの！？」
「いや、眠っているだけだ。これで、氷を砕きなさい」
そう言って彼女は、一振りの刀を、氷魚に手渡した。
「でっ、できないっ！刀なんてっ、あたしに、そんなっ」
「いや、お前ならできる、やりなさいっ！」
「えっ、ちょっと…やっ、やだ、体が勝手に！」
声に導かれるように、氷魚の手は、刀の柄を握り直す。
「そう、それでいい…」
刀が、振りおろされる。
赤い光と共に、氷が砕け散った。

変幻（前書き）

氷魚は、夢うつつで、母と再会を果たす。
新たな覚醒を、目の当たりにして、氷魚は戸惑う。
これから、どうなってしまうのか！？

変幻

「顔をあげて、氷魚」
「う…？」
目を開けると、母が、手を差しだしていた。
氷魚は、その手を取って、立ち上がる。
「氷魚、お前は何があっても、生きてくれ、いいね？」
「お、母さん？」
「そう呼んでくれるんだね、こんな…愚かな私でも」
「愚かなんかじゃ…」
言おうとした氷魚を、彼女の母は遮った。
「ありがとう、氷魚…もうじき、夢がきれるようだ、どこかのバカ弟子が、呼びかけているからな、お別れだ」
「お母さん！」
母親は、哀しそうに微笑ってから、氷魚に背を向けた。
景色が、薄れていく。
目の前が霞んで、真っ白になっていく。

突然、強い呼びかけに、彼女の意識は、急速に浮上した。
「氷魚！大丈夫かっ、俺が、分かるか！？」
「わか、る…ごめんね、瑪瑙」
「よかったっ、お前、もう十日も目ぇ覚まさなくてよ、俺…心配で」
「あのね…お母さんに会ったの、あたしに、覚醒めろって言ってた」
「覚醒？もう、とっくに目覚めただろ？」
「剣士として、って言ってた。同じ血が流れているから」
氷魚は、ベッドから体を起こす。
さらり、と髪が流れて、背中を覆った。
「氷魚…」
「なぁに？どうしたの？」

「お前、髪の色…変わった?!」
「え?」
「そこの鏡、見てみろよ!」
「う、うん」
氷魚は、言われて、鏡を覗きこんだ。
「なに…なんなの、この色!?」
それは、赤だった。
以前のような、淡い色ではなく、まるで、血糊を染め付けたような色だ。
「瑪瑙、あたしイヤ…覚醒って、なに!?あたし、そんなの欲しくないっ、望んでないっ」
氷魚は、瑪瑙の背中にしがみつく。
「ああ、いいんだ、望まなくても…お前は、お前のままで」
「瑪瑙ぅぅ〜」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0893a/

幻夢抄録―目覚め―８章

2010年10月28日03時33分発行